NOVEL
山本沙姫
ILLUSTRATION
ぷう崎ぷう奈
サブマリンガールズ
深海の淫獄
試し読み版
二次元ぷち文庫

当ファイルは、モバイル二次元ドリームにて配信された
『サブマリンガールズ　深海の淫獄』
に基づいて作成しております。

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

サブマリンガールズ
深海の淫獄
山本沙姫
表紙／ぷぅ崎ぷぅ奈
二次元ぷち文庫

登場人物紹介

Characters

東堂（とうどう）・マリア・渚（なぎさ）

海底都市「竜宮一〇一」を防衛する「サブマリンガールズ」の精鋭隊員。身長 170cm、バスト 90cm オーバーのグラマラス体型が目を惹いてやまない黒髪美女。

アイリーン・オーシャン

まだ 19 歳ながら大学で学んでいる海洋生物の知識を買われて「サブマリンガールズ」の一員として活躍している、マリアの後輩。控えめな性格の小柄な美少女。

西暦二〇六六年、とある国が行った新型エネルギー炉起動実験の失敗は大規模なオゾン層の破壊を引き起こし、世界は焦土と化しはじめていた。
降り注ぐ大量の紫外線に母なる大地を追われた人類は、新たな居住地として海底にドーム型の都市を築き、地上にいた頃と変わらぬ生活を送っている。
だが、そこも人々にとって安住の地ではなかった。

ギシッ、ギシッギシギシッ……。
房総半島沖数千メートルの深海、マリンスノーの降り注ぐ漆黒の世界で、銀色の乙女が甲高い悲鳴を上げている。
足を開いた長さが十メートルをゆうに超えるほどの、巨大なカニに抱き締められて。
「たっ、助けてくれぇぇぇーっっっ！」
日本の海底都市「竜宮一〇一」に所属する、おとひめ五号と名づけられた資源探査船。その中で、屈強な髭面の大男が無線機に向かって必死に泣き叫ぶ。
何万トンもの水圧に耐える特殊合金製の船体を、いとも簡単に歪める怪物に襲われているとあっては、日々危険な任務をこなす勇敢な海の男といえども取り乱すのは無理もない。
ギギギギッ……ギシィッ……。
「わっ、わぁぁっっっ！」

踏みつけられたジュースの空き缶のように、卵型の深海艇は刻々とひしゃげていく。このまま、操縦席周りにある視界確保用の大きなガラス窓に亀裂の一つも入れば、一瞬で船体が崩壊するのは必至。

最悪な瞬間が、刻々と迫る。

「だっ、誰か、誰か早く、早く来てくれぇぇっ！」

海底移民がはじまって二十年ほど経った頃から、世界各国の海底都市や潜水艇が、謎の怪生物に襲われるという異常事態が多発していた。

あるものは巨大な節足動物、またあるものは巨大な深海魚など、その姿は多種多様。

そしていずれもが、鉛のように冷たく重い深海を素早く自由自在に動き回り、陸から来た新たな住民に牙を剥く。彼ら招かれざる客が作り出した鋼鉄の船の足の遅さをあざ笑い、排除するかのように。

だが、人類はただ、未知の脅威に怯えているばかりではない。

「いったい、何なんだよおっ！　こいつはぁっ！」

「五月蝿いっ！　死にたくなかったら、おとなしくするっ！」

突然、慌てふためく大男を怒鳴りつける、清涼感のある凛々しい声が響く。

おとひめ五号の危機を受けて、科学の粋を集めて生み出された海底都市を守る二人の戦士が、剥き出しの四肢で水をかいてやって来た。

「はっ、はいぃっっっ！　わかり、ました……」
気迫に押されて固まる髭面男を尻目に、彼を怒鳴りつけた黒髪の女戦士は、長いポニーテールを靡かせつつ操縦席の脇にたどり着く。
そして、日本刀に似た刀を両手で構えて怪物の様子を注意深く観察する。
（……さすがにこの刀でも、ただ斬りつけただけじゃ傷つけるのすら無理かも……）
幾本もの棘に覆われた巨大ガニの鮮やかなピンク色をした甲羅は、水晶のような硬質感のある輝きを放っていて見るからに硬そう。
電柱ほどの太さもある力強い足と相まって、一筋縄ではいかない相手だと本能的に感じざるをえない。
緊迫する状況に心臓が激しく高鳴り、荒い呼吸に釣られて、九〇センチを超える釣鐘型のバストが大きく波打つ。
（とにかく、まずは奴を引き放さないと……）
探査艇のライトに照らされた、サファイヤのように澄んだ青い瞳の美女。その姿は昼なお暗い深海を泳ぐには、あまりに軽装すぎだ。
薄桃色をしたきめ細かい柔肌を持つ、一七〇センチ強の体躯に纏っているのは、膝上十センチほどのミニスカートが付いた濃紺の臍出しワンピース水着。
挑発的に張り出した乳房からキュッと引き締まったウエストを経て左右均等に緩やかな

カーブを描く大きめの桃尻まで、クッキリとボディラインを映し出すそれは、破れにくい特殊繊維で作られてはいる。

とはいえ、人体を深海の高水圧や低温から保護できるような頑丈なものではない。しかも、潜水活動に不可欠なアクアラングすら装備していなかった。

（でも、どんなに硬くても生き物なんだから、どこかに弱いところがあるはず。そこさえ突ければ……）

武器を持っていなければ、気軽にダイビングを楽しんでいるかのような姿。しかし背中に背負った黒い円筒形の推進装置と、耳に付けた、ウサギの耳のようなアンテナの付いたヘッドホン型通信機など、バカンスとは無縁の装備が異彩を放つ。

中でも、首に巻かれた銀色のチョーカーが物々しい。分厚い金属製のそれはアクセサリーにしては重苦しそうで、まるで古代人が奴隷を鎖に繋ぐのに用いた首輪のよう。

（それにしても、救命艇の到着はまだ？　あの怪物を退治できても、間に合わなきゃ意味がないわ……）

鋭角的に引き締まった顔を強張らせ、必死に救助の手段を考える彼女の名は、東堂・マリア・渚。

背中の推進装置の形状が潜水艦に似ている事から「サブマリンガールズ」と呼ばれている、海底都市防衛隊の一員である。

二十六歳という若さながら、優れた洞察力と「鳴神迅雷流」という高速の剣術の腕前を買われて、竜宮一〇一防衛隊のリーダーを任されていた。

「せ、先輩……あんな言い方したらかわいそうですよ。騒ぐと……酸素が減って危険だって、優しく説明すればいいのに……」

彼女の隣でデジタルカメラ程のサイズの生体スキャナーを使い、巨大ガニの構造を調べている金髪ツインテール娘が控えめに話しかけてくる。赤い瞳の目尻を下げた困り顔は、ふっくらとした柔らかな頬のラインと相まって拗ねた幼い子供のよう。

色白で凹凸の少ない、成長途中の少女を思わせる初々しさに満ちた一五〇センチ程の細身の身体を、オレンジ色のスカート付き臍出しワンピース水着で包んだ彼女もサブマリンガールズの一員。

名前はアイリーン・オーシャン。

わずか十九歳という部隊最年少の新人だが、大学で学んでいる海洋生物の豊富な知識をフルに活用して、怪生物の弱点探査などのサポートを主任務としている才女。

また、ライフル競技の国際大会で数々の優勝経験のあるほどの射撃の腕を持ち、戦いにおいても先輩達に劣らぬ活躍をしていた。

「ああいう混乱している人には、いちいち説明するより脅かした方が手っ取り早く黙らせられるのよ」

不満げに口を尖らせる妹分に対して、渚は優しく諭すような口調で答える。少々物騒な話の内容と、数千メートルの深海という特殊な場所を無視すれば、まるで楽しげに言葉を交わす仲のいい姉妹のよう。

「少しでも酸素を節約させたいのはわかります。けど、言葉を選ばないと、また怖い人だと思われちゃいますよ……」

根は優しいのに、口の悪さで何かと誤解されがちな姉のように慕う先輩戦士を気遣い、心配性の後輩戦士はやんわりと注意をする。

「ふふふっ、そんなに気にしなくていいわ。それより、どう？　あいつの弱点はわかった？」

「あっ、はい……どうやら、関節部分だけは他の甲羅より……若干強度が落ちるようです」

調査員を怒鳴りつけた理由を説明した時と一転して、真剣な面持ちの渚が呼びかけると、アイリーンは少したどたどしい口調で答える。

小さな鼻をヒクつかせた、いつにない不安げな表情が、弱点を見つけてもそこを的確に攻める手段を見出せていないのを物語っていた。

「関節か……！　OKっ！　それなら、奴の足を切り落としてやればいい、ってことね。簡単よ」

彼女の胸の内を察し、不安を振り払うように美貌の女戦士はパチンと指を弾くと余裕の笑みで、閃いた大胆な救助作戦を告げる。

「そんな！　一本でも斬るのにもたついていたら、他の足で攻撃されます。危険です……」
楽天的に振舞う姉貴分を心配して、健気な少女戦士は彼女の右手にしがみついて懸命に引き止めた。
しかし、勇敢な剣士の決意は変わらない。
「大丈夫よ。でも、もしもの時は援護してね。期待してるわ」
軽くウインクして、二の腕を掴む小さな手を優しく解くと、渚は推進装置のスイッチを入れ、怪物めがけて一気に突き進む。
ブルルルルル――――！
「あっ、せっ、先輩……待って！」
低いスクリュー音に混じって、微かに響く後輩の心配そうな叫びを背に受けつつ、剣を真横に構えて怪物ガニの右前足に斬りかかる。
「たあぁぁぁ――っっっ!!」
ブォッ！　ガギィッ！
鋭く水をかき回す音と共に、銀色の刃が第二関節を見事に捕えた。
鳴神迅雷流奥義、雷光斬。その名の通り落雷の如き勢いで剣を振り抜くだけでなく、突進力も加えて一太刀で直径二〇センチの氷柱を切り倒す程の威力を出す、彼女の最も得意とする剣技だ。

しかし、キチン質の鎧は異様なまでに硬く、渾身の力を込めた一撃をまるで受けつけない。逆に刃が震え、細い手に激しい痺れが走る。

「くっ！　弱いところでもこんなに硬いなんて。ならば、これでどう!?」

パチッ！

手の痺れを堪えつつ、渚は剣の鍔の下に付いたスイッチを押す。

バィィィィィ――――――ンッッッッ！

すると刃が甲高い音を立てつつ高速振動をはじめ、刀身周りから細かな泡が沸き立っていく。

「ぬぅあぁぁぁぁぁ――――っっっ！」

さらに眉間に皺を寄せつつ、両腕に力を込めて愛刀を押し出していく。

ガリッ！　ガガガガガ……。

すると今まで深海艇を締めつけてきた怪物が、今度は逆に自分を攻める斬撃に耐え切れず、関節から悲鳴を上げはじめる。

「どうかしら？　剣技と科学のコラボの味は？」

彼女が使うのは、振動剣。すなわち、刃を激しく震わせて切れ味を増す刀であるが、同時に長時間使えば刃が発する音波で自身の耳にダメージを負ってしまうという諸刃の剣であった。

（いける。これなら……）

ガリッ、ガリッ、ガリッ……。

薄氷を踏み壊すような軽い破砕音と共に、甲羅の破片を撒き散らしながら、刃が徐々に巨大ガニの関節に食い込んでいく。

「よし、あと少し……」

どうにか最初の難関を越えられそうなところまで来られて、険しかった渚の顔が安堵感に少し緩む。

「グガッ！　ガァッ！」

だが、あと一歩で切り落とせるところまできて、痛みに耐えかねたのか怪物は牙を擦り合わせた威嚇音を出すと同時に、左前足を振りかざしてきた。

鋭いハサミが開き、黒髪の剣士に襲いかかる。

ブオンッ！

「えっ！　きゃあっ！」

避ける暇もなく、思わず渚は長いポニーテールを振り乱し、目を硬く閉ざして身を竦めてしまう。

シュオンッ！　バガァンッ！

だが、あわや頭を挟まれるかと思った瞬間、破裂音と共に怪物の攻撃がピタリと止まる。

「あうっ！」

コキッ、と股関節が音を立てるほど広げられた股の間に、いきり立った赤黒い触手が迫る。先割れから饐えた悪臭を漂わせ、表皮に幾本もの血管を浮き立たせ、ビクビクと小刻みに痙攣しながら。

「……い、いゃぁっ！」

さすがに男性器の姿を連想できないうぶな乙女でも、ここまでされれば触手が二種類ある事は理解できる。

そして、自分の身に何が起ころうとしているのかという事も。

「だめぇっ！　そっ、そんなの……いっ、入れないでぇっ！　やぁっ！」

幼顔を真っ赤に染めて、長いツインテールを振り乱しながらアイリーンは泣き叫ぶ。略奪者の侵入を防ぐべく、華奢な太腿に全身の力を込めて最後の抵抗を試みても、股を閉ざすどころか膝を曲げる事すらできない。

ピチュッ！

「あぅっ！」

抗う術もなく、黄金色の草原の下に隠された赤みがかった乙女の丘に走るクレヴァスに、硬く膨らんだ異形の雄の歪んだ欲望の証が押しつけられた。

「やっ、やだ……こんなの……」

えっ、試読！　エロシーン　ピックアップ

敏感な表皮から子宮に向けて、火傷しそうなほどの熱さが、小柄な少女の未熟な産道を伝わって一気に駆け抜けていく。
「また、痺れちゃう……いっ、いゃぁんっ！」
体組織変換の時に味わった、甘美な刺激が身勝手に押しつけられる。だが、それはこの後訪れる生き地獄の幕開けでしかない。
「おっ、お願い……ひぐっ、こ、これ以上は……許して……」
「ふふふ、残念だがそうはいかんなぁ」
ギジュッ！
嗚咽を上げながら告げられた少女の最後の願いは、脈打つ極太の肉槍によって無残に引き裂かれた。
「ひぃぃぃっ、だっ、だめぇぇっっっ!!」
股間から脳天に向けて、一気に突き抜ける破瓜の激痛に耐え切れず、アイリーンはか細い身体を仰け反らせて叫ぶ。
「ほほう、お前も初物か、なかなかいい締まりをしている。たっぷりと、楽しませてもらうぜ」
下品な口調で囁きかけながら、イカ型巨大怪物は無理矢理抉じ開けた少女の肉穴の中へ、いきり立った己が分身を無遠慮に押し込み続けた。

「やっ、やだ……やめてぇっ！」
悲痛な望みも空しく、薄い金髪に覆われた秘園の中を、凶悪なケダモノが強引に突き進んでいく。未熟な産道を押し広げ、燃え滾る表皮で肉壁を擦りながら。
「いっ、痛い……裂ける、股が、裂けちゃうぅっ！　やっ、やぁぁっっっ！」
ズリュッズボッブズズジュッ！
ほっそりとした少女の白い肉体が突き上げられるたびに、甲高い叫び声と共に股間から粘り気のある水音が鳴り響く。その調べは、気絶していた彼女の目を覚まさせた音と同じもの。
（！　あれは、春香先輩と三沙子先輩が……犯されていた時の……）
何もできず気を失っていた自分のすぐそばで、大切な先輩達が子種を押しつけられ、望まざる出産を強いられたのを悟り、アイリーンは愕然となる。
（チーフに、まかせてなんて大きな事言って、先輩達を助けられなかったなんて……）
仲間を汚され、我が身さえも蹂躙される悔しさと、役に立てなかった己の不甲斐なさに、生真面目な少女戦士のガラスハートは砕けていく。
「……あきらめておとなしくなったか？　だが、それでは面白くないなぁ～」
失意のあまり、ガックリとうな垂れる捕われの美少女戦士に、醜悪な怪物は残酷な欲望を押しつける。粘り気のある不満げな口調で漏らすと、吸盤のない方の触手を膨らみかけ

の胸へ伸ばしてきた。
「こっ、今度は何……ひぎぃっ！」
ギニュッ！
先端の割れ目を器用に開き、小振りな乳房の突端に載る青い果実をきつく抓ってきた。
鳥肌立つ柔肌の下を激しい電撃が走り、全身がガクガクと震える。
「ふむ、小さいがなかなかよい感触の蕾だ。それに……」
グルリュッ、グニグニグニッ……。
「はぁうっ……くふっ……」
さらに乳首を抓んだまま、脈打つ軟体で幼さを残すバストをグルグルと締めつけてきた。
「き、きつい……やぁっ……だめぇ……」
「ボリュームには欠けるが、柔らかさはさっきの二人に劣ってないな。ぐふふ、いいぞ、いいぞぉ～」
初々しい肉体の柔らかさと、雛鳥の囀りを髣髴とさせる可愛らしさを少々纏った悲鳴を堪能しつつ、巨大怪生物は彼女の中に突き込んだ肉欲の塊をさらに激しく動かしはじめる。
ブズジュルッ、グリュッグリュッグルュッ……。
「やっ、そっ、そんなに暴れ……ひぃぃっ！」
なだらかな下腹部を微かに膨らませ、膣内で蠢く異形のペニス。

全体に生臭いぬめりを纏ったそれは、鞭のようにしならせながら素早く前進後退を繰り返したかと思えば、亀頭を小刻みに震わせつつ、ゆったりした動きで膣壁を擽ってくる。
「あっ、熱い……あづいひぃいっっっ！」
胎内を蠢く長い触手が、乙女の身体を内側から焼き焦がす。まだ蕾でしかない、性の悦びに疎い未熟な肉体を、少しずつ花開かせながら。
ネブチュッ、ネブチュッ、ネブネブネブブッ……。
（やだ、何？　この感じ……）
下腹部の奥底で、爆竹を髣髴とさせるバチバチとした衝撃が徐々に湧き起こりはじめる。
（こんなの、だめ、耐えられない……）
身体の中を針で小突かれるように攻撃的な、それでいてどこか気持ちいい刺激の目覚めに、うぶな少女は戸惑いを隠せない。
グチャグチャグチャグチャ……。
「やっ、やめて……きびぃっ！」
本能的に、この感覚に飲まれては危険と感じたアイリーンは咄嗟に内股に力を込めて、突き込まれる肉棒を挟み、ピストン運動を止めようとしてしまう。
「おお、これは随分と積極的だな。いいぞ、もっと気持ちよくしてやる」
だが皮肉な事に、彼女の見当違いな抵抗はより一層自分を苦しめる事となってしまった。

己が分身に強烈な締めつけを感じ、ますます興奮したイカ型の怪物は胎内に送り込んだ肉槍をさらに膨張させて少女の膣内を蹂躙する。

ビジュッ、ギジヂュッヂュッヂュプジュブッ……。

「ふわぁっ、はっ、はっはっ、はぁっ……あくぅっ……くっ、くるひ、い……」

股間を突き上げられるたびに、華奢な身体を海上まで飛ばされるかと思うほどの衝撃を受けて、身を震わせて喘ぐアイリーンは徐々に頭がぼやけてくる。

なぜなら、海中活動に適応したサブマリンガールズは性器が呼吸器の役目も果たしているため、水中でヴァギナに異物を突っ込まれるのは口や鼻の穴に詰め物をされているのと同じ。

臍でも呼吸できるため窒息こそしないが、軽い酸欠状態には十分に陥りうる。

「あぁっ、りっ、りゃめぇっ……こんなの……」

脳に酸素が回りきらず、抵抗する気力が衰えてくるにつれて、横暴な男根が押しつけてくる邪な快感が彼女の頭の中でどんどん膨らんでいく。

「あはっ、ひっ、ひぃいっ、いひぃいっっっ……」

だらしなく半開きにした口から、呂律の回らない喘ぎ声が止め処なく漏れる。いつしか彼女は、小振りなヒップを前後左右にふしだらに揺らし、みずから産道の中で暴れる巨根から心地いい刺激を貪るようになっていた。

（いい、いっそ、このまま……）
「ぐぅぅぅっ、そっ、そろそろ……いくぞおっ！」
だが、夢見心地の少女はドスの効いた呻き声で過酷な現実へと引き戻される。
「……あっ！　あぁぁ……」
ハッと我に返ったアイリーンの脳裏に、ついさっき見た先輩二人の悲惨な姿が甦った。
「いっ、いゃぁっ！　膣内（なか）にだけは、出さないでぇっ！」
このまま、怪物が押しつける快楽に飲まれ続けていれば、自分も醜悪なケダモノの母となってしまう。
懸命に華奢な身体を揺すって、触手から逃れようとしても、もはや手遅れ。
グッチャグッチャグッチャ、ビグッビグビグッ……。
粘り気のある淫音を奏でる肉壷の奥底で、燃え滾る淫欲の松明が激しく痙攣する。
それは、発射の時が近づいているのを告げる合図に他ならない。
「よっ、よーし、出すぞおっ！　良い子を孕むのだぞおぉぉっ！」
「ひいっ、だっだめぇっ、ゆるしてぇぇぇ――――――っっっっ――――」
ブワビジュルルルル――――――ッッッ、ドグンドグンドグンドグンッッッ……。
ついに、悲痛な叫びを上げる少女の幼膣の中で、邪な肉欲のマグマが炸裂した。
「あ、あぁ……わたし、こんなのの……産んじゃう、の……」

下腹部の中に熱湯を注ぎこまれたような熱さが広がっていくのを感じつつ、アイリーンはガックリとうな垂れた。呆然となる彼女の赤い瞳は、普段のルビーに似た輝きを失い、視界がぼやけていく。

「ふふふふ、初産はすぐだぞ。楽しみにしておけ。どれ、その間にそっちの二人にもまた頑張ってもらうとするか……」

大きな目でグッタリしている二人のサブマリンガールズを睨みつつ、巨大イカは彼女達に触手を伸ばす。

（もう……だめ……）

最悪の瞬間が訪れるまであとわずかと聞きつつ、アイリーンは意識が遠のいていった。

（反応が強くなってきた。アイリーンは、きっとこの洞窟にいる……）

一度は大切な後輩を見失ってしまった渚ではあったが、無線機から出る所在信号を追って、洞窟にたどり着く事ができた。

時折襲い来る小型のイカ型怪生物を撃退しながら、彼女は棘棘しい不気味な岩のトンネルを注意深く進んでいく。

（三沙子と春香も、こいつらに襲われたのならここにいるはず……お願い、無事でいて……）

サクッ……。
思わず手放した剣が、軽い音を立てて泥底に突き刺さった。
「ふふふふ、残念だったな、サムライガール。さて、どう料理してくれようか……」
青筋を立てた無数の触手を、目の前にこれ見よがしにちらつかせつつ、イカの怪物は粘っこい口調で話しかけてくる。
巨大な目が、心なしか邪な肉欲を湛えてギラギラと異様に輝いている気がした。
「くっ、はっ、放せっ！」
肌も露なムチムチの体躯を激しく揺さぶり、捕われの剣士は絡まった軟体を振り解こうとするものの、相手はビクともしない。
「そうはいかん。お前にも、俺の野望のために働いてもらおう。我が子を増やし、世界中の海を支配するためにな」
「そっ、それがお前の狙いかっ！　だったらメスイカとでもヤってろ！　この化け物め！」
絶体絶命のさなかで、恐るべき野望を聞いてもなお、勇敢な海の戦士は憎まれ口を叩いて抵抗する。
だが、引き攣った顔と力なく垂れ下がった目尻に、迫り来る危機への恐れが滲み出ていた。
（あんなもの、入れられたら、あたし……）
目の前で蠢く無数の男根が、まるで獲物を狙う大蛇の如く亀頭をこちらに向けてゆっく

ラストシーン試し読み
ここからスタート！

りと迫ってくると、彼女はますます無駄な抵抗を試みてしまう。
「くうっ、こっ、この……」
それは事態を打開できないどころか、むしろ忌むべき敵を楽しませていた。身を捩るたびに、スイカのように丸々とした巨乳がプルンプルンと波打つ。
身体の動きに釣られて水着のスカートが何度も捲れ、薄い柔毛を纏った赤味がかった恥丘が、目の前で欲望を滾らせた異形の男をじらすかのように顔を覗かせた。
「ふふふ、気が強い上に、随分と厭らしい身体をしている。気に入ったぜ」
嬉々として呼びかけてきた巨大怪物は、文字通りイカ臭いぬめりを纏った触手を、引き裂かれんばかりに広げられた美貌の剣士の股の間に伸ばしてくる。
「やっ、やめ、やめろおっ！　だめぇっ！」
最も敏感にして神聖な部位を小突く熱い醜肉の先端が、渚の心を覆っていた戦士の誇りという名の鎧を打ち壊し、徐々に乙女の素顔を晒させていく。
「こっ、こんなの……だめぇっ！」
刻々と迫る望まざる種付けの恐怖に耐え切れなくなり、彼女は長い黒髪を振り乱して泣き叫ぶ。もし水中でなければ、サファイヤのように青い瞳から大粒の涙が止め処なく溢れ出ていたに違いない。
「いいねえ、その声。ますます気に入った、ぜっ！」

ギジュルッ！

「ひっ！　ひぎぃいっっ！」

ついに触手の先端が、漆黒の若柴に覆われた秘唇を押し広げた。固く張った亀頭のエラ辺りまでが、乙女の固い肉の門の内側へ侵略を開始する。

「ぐふふふふ、一日でこんな上玉の初物四人も手に入るとは、我ながらツイているぜ」

興奮気味の上擦った声で喋りつつ、怪物は突き立てた長いペニスを右に左にうねらせながら、少しずつヴァギナの奥へ突き進めてくる。

ズリッ、ズビュッズブズブズブブブ……。

「ひぐっ、ひいっ、あぁっ……」

膣壁を固い突起で強引に押し広げつつ、胎内を蠢く異形の物体。身を裂くかと思う程の衝撃と、火傷しそうなくらいの高熱を放ちつつ、好き勝手に暴れるそれは少しずつ、そして確実に、渚の心からさらなる鎧を剥ぎ取ろうとしていた。

理性と言う名の、最後の砦を。

（なっ、何……この、感触……）

下腹部の奥底で湧き上がる痛みに紛れて、痺れるような感覚が見え隠れする。まるで、何か見えない渦に引き込むかのように。

「ひぎぃっ、はっ、放せぇっ！」

口では抗ってみても、心と身体が甘美な刺激に疼いてしまう。
グジャグジャグジャグジャ……。
秘唇が奏でる淫靡な調べが、彼女の脳髄を淫欲に染めるエッセンスとなっていく。
（やだ、こんな音……恥ずかしい……）
いかに気丈な戦士とはいえ、中身は若き乙女。時には密かに想いを寄せる殿方と結ばれる我が身を妄想し、みずから秘所を慰める事もある。
その時と同じ粘音が、広い洞窟内に反響すると、自然と興奮してしまうのだ。
「くうっ、はっ、はぁっ……あうっ、あっ……」
時が経つにつれて、徐々に頭がぼやけてくる。彼女もまた、呼吸の役目も果たす性器を蹂躙されているせいで、軽い酸欠状態に陥っていた。
「はぁっはぁっはぁっ、くっ、あうっ……あ……」
抗う気力が失せていくにつれて、入れ替わりに股間の中で燻る快感が際立ってしまう。
（だ、だめ……飲まれちゃ……）
理性と快楽の間の、危うい心の綱渡りを続ける彼女は、それでも唇を噛み締めて必死に抵抗しようとする。
たとえこの先、運よく懐妊を免れても無理矢理押しつけられる快感を受け入れてしまったら、もう人として生きていけない気がしていたから。

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行
株式会社キルタイムコミュニケーション
〒104-0041　東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル
TEL03-3555-3431（販売）／FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改さん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。
ⓒKILL TIME COMMUNICATION　Printed in Japan

http://ktcom.jp/